

—— 司馬遼太郎「街道をゆく」再読 ——

理事 高橋正宏

書齋の様態替えを 20 年ぶりに先日行った。本棚の奥から司馬遼太郎の「街道をゆく」全 43 巻の文庫本が出てきた。

「街道をゆく」は 1971 年 1 月 1 日号の「週刊朝日」で連載が始まり、順次文庫化されたもので、1996 年の著者の急逝によって未了稿となった 43



巻、「濃尾参州記」まで、25 年にわたって書き継がれたものである。何気なく第一巻から読み始めたところ、数十年前の日本の形が目の前に立ち現われ、43 巻まで読み通してしまった。本の奥付から、これらを最初に購入したのは 45 年ほど前ということになる。

何よりも、古い日本がまだかすかに残っており、それが経済発展のため、風前の灯となっていることを、淡々と、時には激しく訴える著者への共感が湧いてくる。洛北諸道では大悲山峰定寺へ訪問した。そのころの峰定寺は、「観光客も誘致せず、たとえ来ても五時以降は山に入らず、中略、変なお寺商売もやりたくない、中略、平素は山樵で、お経を売って飯を食うこともしない」（4 巻、洛北諸道 42 ページ）という質朴な僧に守られた寺であった。今、ネットで同寺を見ると、清閑なお寺として評判は高いようであるが、もちろん観光客の誘致を行っている。43 巻には参州（三河）、高月院の話がある。当時より 30 年ほど前に司馬氏が訪れたときは、小さな尼寺のようで「日本の諸風景の中での重要な一風景だった」が、今次の訪問では、神社の脇に時代劇のセットのような建物が建てられ、パチンコ屋の軍艦マーチのような音楽が拡声器で流れていた、と憤慨している。「こんな日本にこれからもながく住んでゆかねばならない若い人たちに同情した。」（43 巻、濃尾参州記、63 ページ）。これが 30 年前の

司馬氏の嘆息である。

本書が書かれた 1970～1990 年代は確かに日本中が浮かれ騒いでいた時代であり、一方、明治、大正の生まれの方が存命で、その香りが残っていた時代でもあった。インターネットも AI もなく、人々は濃厚な関係でつながっていた。

現在は、行き過ぎた経済中心の活動に多少の反省は生じているが、SNS や AI により、人々はますます孤立し、仮想の現実の中でのつながりだけが強まっている。これから、日本や世界がどのような社会になっていくのかは過去の延長では推し量れず、誰もわからない。「街道をゆく」に描かれた確かな世界が、かつてあったことを伝えていきたいものである。ちなみに、今、私は司馬氏が急逝したと同じ年齢の 72 歳である。

—— 2026 年度活動報告 ——

東京都水道歴史館見学会

理事 村上孝雄

5 月 21 日（木）午後、会員 11 名で文京区本郷の東京都水道歴史館を見学した。同館は都水道局の PR 施設で、江戸上水から近代水道、現在の水道に至る歴史や技術を、多数の展示や映像資料などで紹介している。

見学は、2F の神田上水や玉川上水等、江戸上水関連の展示からスタートした。木樋や上水井戸は実物で、当時の姿のまま。江戸の長屋が再現しており、暮らしぶりが目に浮かぶ。長屋では、定期的に住民総出で井戸掃除をしたそうで、上水井戸は共有の重要施設だったことがわかる。

玉川上水に関しては、幕府の公式記録「上水記」が保管されており、当時の絵図が展示されていた。同上水は、江戸市中に上水を供給する施設であるが、途中、野火止用水や千川上水等の多くの分水により広大な地域に水を供給していた。また、僅か 90m の高低差で 43km もの距離を自然流下させており、精密測量機器もない時代に、このような長大な水路を短期間で建設したことには驚くばかりだ。中世の城郭もしかり

だが、機械力皆無の時代に、人力のみで壮大な施設を建設した昔の土木建築技術には感銘を受ける。

1Fは明治以降の近代水道関連の展示で、実物の給水栓、消火栓等があり、中でも牛馬用の馬水槽は面白かった。また、水道用铸铁管の変遷が分かる展示も興味深かった。展示見学後は、会議室で金子学芸員による東京水道の歴史のレクチャーがあった。わかりやすい説明で、質問にも丁寧に答えて頂いた。

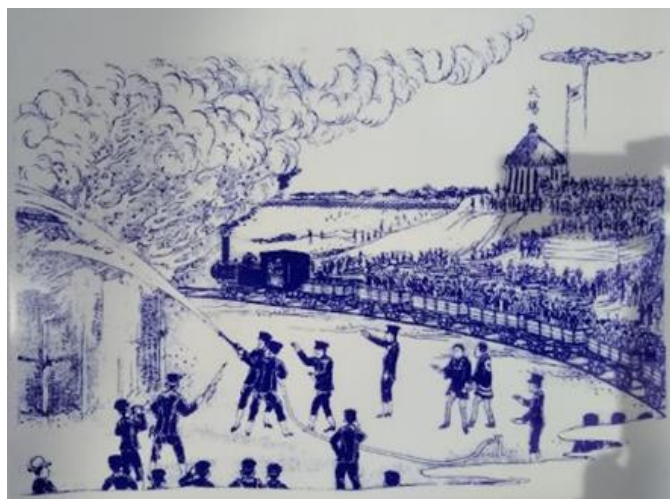
さて、見学会後の帰途、歴史館外の道沿いに何枚かの陶製パネルがあったが、その内の1枚が旧淀橋浄水場起工式の図で、汽車や燃える家屋に放水している消防隊が描かれている。「消火栓があるのなら竣工式では？」という疑問も出たが、調べたところ、起工式には、新橋から特別列車で3,000人もの来賓を運び、また改良水道の水圧効果を市民に示すため、消火栓を設置して消火訓練を実施したそうだ。もはや国家プロジェクト級のイベントであり、改良水道と新浄水場への市民の期待の大きさが感じられた。

なお、筆者の勤務先も淀橋浄水場跡地近くで、周辺には今も淀橋の名があちこちに残っている。淀橋浄水場は、昔は上水供給により市民生活を支え、今、その跡地は高層ビル群となり、我国のビジネスを支えているのである。

夕方、有志で御茶の水の居酒屋において反省会を行い、享保期の三田用水他の廃止の真相等について真剣かつ深遠な議論を交わした。有意義な見学会であった。



江戸上水の木樋



淀橋浄水場起工式の陶製パネル

久津間海岸の干潟（盤州干潟）見学会報告

顧問 亀田泰武

小櫃川河口に一番近い久津間海岸に初めてでかけた。見学会の参加者は、総数4名でNPO水倶楽部からは3名。集合は4月20日（月）9:30 木更津駅西口出口で、世話役の生き活き東京湾研究会の大野氏に送っていただいた。当日、干潮は12:37の潮位が-2cm。天気は薄晴れ

干潟に降り最初に目についたのが大量の米粒のような砂だんごでコメツキガニによるものらしい。ここの干潟は木更津よりも遠い沖まで広がっていた。

調査は浜への入口左の、貝が撒かれていないところから始めた。ここでは潮干狩り場は歩いて10分以上もかかる沖の区画の中であった。沖の方へ移動しつつ所々掘って調べた。ここも貝の生息は非常に少なく、アサリ稚貝一つが2回に一回見られる程度。稚貝の殻は茶色と白のこの辺特有のもの。貝殻模様が2段になって、生育途中で長い距離流されるなどの大きな環境変化が考えられる。たまにけっこうの大きさのハマグリが取れ、自分も沖までの調査時間90分で6cm、4.5cm、2.5cmの3個、他のメンバーも同程度取れた。一番沖の所で一カ所で作業をしている人がいた。マテ貝の穴に塩をいれて飛び出してくるマテ貝を捕まえるもの。15個くらいもあり、場所によってけっこうな生息密度になっているようである。その後、潮干狩り場まで戻り、お土産の貝掘りをした。



2cmほどのアサリの稚貝 模様が2段になっていて生育途中で大きな環境変化があったように見える

木更津の干潟（盤州干潟）見学会報告

顧問 亀田泰武

今年で16回目となり、参加者は、総数5名でNPO水倶楽部からは4名。集合は5月18日（月）9:00 木更津駅西口出口

で、この日も大野氏に送っていただいた。当日は新月で、干潮は11:35の潮位が-14cm、天気は薄曇り

干潟に降り最初に目についたのが去年同様、砂のとぐろで、これはタマシキゴカイが吐き出した砂。調査は潮干狩り場の東隣の、貝が撒かれていないところから始めた。沖の方へ移動しつつ所々掘って調べた。岸からしばらくは貧相であった。歩いていると時々海水が噴き出すことがあり、生きているマテ貝1個に遭遇し、マテ貝の殻もある程度あったので、マテ貝はある程度復活しているようである。

沖の方にしばらく歩いていくとコアマモが見られるようになり、アサリが出現しだした。3~4百メートルくらいだろうコアマモが大きく広がっていて、大きなアサリやシオフキがある程度存在。コアマモがアサリの生育に良いということを示している。ただし熊手操作2回に1回という程度。アサリの大きさはこの辺では普通3cm程度であるが約4cm程度と大きいのが大半で、稚貝が少ない。これは最近の定着が少ないことを示しているようである。今年3月の東京湾シンポジウムで、千葉県水産技術センターがコアマモを増やすことによってアサリを豊かにする旨の発表をしていた。コアマモの生えていない所に比べ、アサリの数が飛躍的に多いのは明らかであるが、定着の継続性や生息密度など考えると大規模に実施するには効率があまり良くない感がある。



沖の方に行くにつれアマモが増えてくる。ここら辺まで砂とグロが多い。



コアマモ原で取れたアサリ、黒ずんだ模様で4cmくらいのが多い。

徒然水草 其之拾参 「政治家御愛用言葉ランキング」

嫌気好気法師

二月の総選挙では、候補者達は寒風の中、声を枯らして「しっかり、きちんとやります！」と訴えていた。選挙時のみならず、国会論戦等でも「しっかり」や「きちんと」は頻繁に耳にする。

あまりに乱発されるので、気になって、使用頻度を調べてみた。どうやって調べるのか？実は「国会会議録検索システム」なるものがあり、これで議事録が容易に入手できる。令和5年2月と令和6年12月の衆議院予算委員会の議事録を選び、二つの議事録中に「しっかり」、「きちんと」を始め、どんな言葉が何回出てくるか数えた。「暇だねえ」と言われそうだが、一つ一つ数えるのではない。議事録はPDF文書なので、検索をかければ、どの言葉が何回使われているか瞬時にわかるのだ。

調査の結果は表のとおり。令和5年と6年で傾向に若干の違いはあるものの、予想通り「しっかり」が断トツの1位。続いて「きちんと」が2位、「ちゃんと」が3位にランクイン。4位には「適切」が入った。最近流行の「真摯」は意外に少ない。

(ここでは「統計学的に、このデータだけでそう言い切れるのか？」などと鋭く突っ込まないようにしましょう)

上位にランクインした言葉は、「促音(っ)」や「撥音(ん)」を含むものが多い。「促音」は、直後の子音を強く発音するため、力強さや切れ味が出て、決断力や明確さを印象づける効果がある。また、「撥音」は鼻音で柔らかい響きなので、まとまり感や終止感を感じさせ、重厚さや信頼感の印象を与える。「しっかり」や「きちんと」は、明確で信頼できるという印象を聴衆に与えられる言葉なのだ。

一方で、「濁音」を含む言葉(確実、着実、万全)は順位が低い。やはり、発音が濁るため、強さは出る一方で重い印象を与えるためだろうか。「しっかり、きちんとやります！」の方が「着実、確実にやります！」よりも、軽快でスピード感がある印象だ。

ただ、ここで筆者は若干の懸念を覚える。それは「しっかり、きちんと」はあまりにも語感が良いので、繰り返しているうちに、何もしていなくても、「やった感」「達成感」が醸成されてしまうということだ。「しっかり、きちんと」を連発して当選された政治家の皆様には、「やった感」だけではなく、是非、公約実現に注力して頂きたいものだ。

末筆ながら、かく言う筆者も、今後とも21世紀水倶楽部の益々の発展に向けて、微力ながら「しっかり、きちんと」役

割を果たしてゆく所存であります。

	令和5年	令和6年	計
しっかり(と)	128	94	222
きちんと	14	61	75
ちゃんと	19	41	60
適切	22	10	32
はっきり	4	9	13
きちっと	6	5	11
確実	1	9	10
着実	5	4	9
真摯	3	3	6
万全	3	1	4

編集幹事のあと整理

- NL89用にと原稿募集したところ、期日前に数編集まったので、とりあえずそれらの稿だけで今号は編集、発行しました。募集して報告行事前になっているものなどは次号(NL90)送りになります。期待してお待ちください。
- 高橋理事の巻頭文は司馬遼太郎「街道をゆく」完読記。編集幹事も発刊当時につまみ読みしたが、全巻のうちどれが既読か記憶にない状態でいまって再読整理に苦慮しています。高橋氏のように完読されたかたはうらやましいです。
- 村上嫌好法師からの其之拾参。私とその昔苦労した国会質問への答弁案作成。AIを駆使する昨今ですが、より効果的な答弁にも使えそうです。
- 会員だよりコーナーへの投稿を募集しています。投稿はいつでも受け付けます。直近の号に掲載します。投稿要領などは望月から毎回お出ししている原稿依頼メールをご覧ください。

編集幹事・望月